

Vita Contemplativa

—ギリシャ人の哲學的生活理想—

藤井義夫

ギリシャ人の倫理觀ないし哲學思想はどのやうな生活理想によつて培はれたのであらうか。いはゆる哲學者的生活は卓れた藝術家的資性に恵まれたかれらの生活感情から、我々が今日一般に想像してゐる程、疎隔してゐたのであらうか。他のいかなる民族にもまして生活と理論 (*Bios kai Logos*) との統一を實現してゐたといはれるところのギリシャ人にあつて、その哲學的生活理想はどのやうなものであつたのであらうか。これらは「ギリシャ人の哲學」の基本的性格を最もギリシャ的に理解するために、まづ明かにさるべき極めて困難なしかしまことに興味のある問題である。これについて我々に最も確實な手懸りを與へるのはなによりもアリストテレスの「ニコマコス倫理學」であらう。かれはこの著作の開卷、第五章の著名な箇所において、享樂的生活 (*ainoioumenos bios*)、政治的生活 (*politikos bios*) 及び觀想的生活 (*theoretikos bios*) の三つを別し、これらをそれぞれ俗業、政治家、及び哲學者の生活理

想に配してゐる。⁽¹⁾ その意味はおよそ次の如くであらう。凡ゆる行爲、學問、技術などはその目的として何らかの善を希求してゐると考へられるが、それが自己の中に目的をもち、他の凡ての願望の根據となるとき最高善であることは明かである。我々の生活にとつて大いなる重要性をもつところのかゝる善の知識あるひは能力はなによりも政治的な、(political) 學問に屬してゐる。従つてその目的は人間的善であり、他の諸々の學問の目的をも包括する。けれど善は個人にとつても國家にとつても同じ意味をもつにしても、國家の善を實現することの方がより究極的であり、より神祕的だからである。倫理學もまたこの意味において政治的な學問であるからして、かゝる善を究極的目的として追求する。⁽²⁾

ところで凡ゆる善のうち最高のものとは何であらうか。それは衆目の睹るところ幸福 (εὐδαιμονία) に歸一する。我々にとつては、プラトンが言つたやうに、たゞ生きること (ζῆναι) がではなく、よく生きること (εὖ ζῆναι) が尊重されるべきである。よく生きるものが幸福なのである。しかし幸福とは何であらうか。世の最も卑俗な人々にとつては、それは快樂に外ならぬであらう。かれらはかゝる家畜の生活を選ぶことによつて、かれらが全く奴隸的な人間であることを示してゐるのである。これに對して精練された實踐的な人々にとつては名譽が善であり、幸福であるやうにみえる。なぜなら政治的生活の目的は恐らく名譽にあるのであらうから。しかし名譽も皮相的なものであつて、その人に固有のものではない。名譽はこれを與へられる人によりも、むしろこれを與へる人に依存してゐるからである。さらに名譽を追求するのは自己が善人であることを信じるためである。それ故にかれらは思慮ある人々によつて自己の徳の故に名譽を與へられることを求めるのである。従つてかれらに從へば明かに徳がよきものであり、むしろ

政治的生活の目的は徳であると言ひうるかも知れない。しかし有徳の士にしてなほ生涯を無爲に暮すことも可能であり、非常な不幸に遭ふこともありうる。かゝる生活が幸福であるとは何人も主張しえぬであらう。かくて哲學者にとつての究竟的な幸福は觀想 (Beopizn) でなくてはならぬ。それは同時にその純粹性と不動性とにおいて驚嘆すべき快樂を含んでゐるのである。^(四) しかしまさしく我々の主題をなすところのこの觀想的生活については後に再び還らう。我れにとつて今のところ重要なのはギリシヤ人の生活態度の理想型としてこれらの三つのものが提示されてゐるといふ事實である。

そして人間の幸福を快樂 (Hedonē) 徳 (dierē) 及び思慮 (epithymē) の三つに求めようとする同じ思想がアリストテレスの初期時代をも強く支配し、かれの初期の著作「プロトレプティコス」の基調をなしてゐることは、すでにイェーガーによつて周匝に論明された通りである。^(五) さらにまたこれら三つの生活理想の區別はアリストテレス以後の諸學派にも傳承せられ、ストア學派にあつては觀想的生活 (Beopizneōs bios)、實踐的生活 (praktikōs bios) 及び合理的生活 (logikōs bios) のうち最後のものが選ばれるべきものとして主張され、^(六) ペリパトス學派にあつては最初觀想的生活、實踐的生活及び兩者の結合のうち最初のもものが最も卓れたものと看做され、享樂的生活は人間の尊嚴に相應しからざるものとして卻けられ、そして後次第に實踐的生活が重視されるに至つたことはすでに人の熟知するところであらう。^(七)

通常アリストテレスのものと思はれてゐるところのこれらの思想は、しかし、「最も汎く行はれてゐるもの」、「何らかの論據をもつと考へられるもの」あるひは「流布してゐる論」と誌されてゐるところからも明かであるやう

に^(八)、かれが創説したのではなく、當時一般に熟知せられ、承認せられてゐた所論を取り上げたに過ぎぬとみらるべきであらう。我々はその證跡をすでにプラトンのうちに見出すことができる。なぜならば「ポリテイア」第九卷において人間を知識を愛するもの (*φιλοσοφία*)、勝利を愛し、名譽を愛するもの (*φιλοτιμία καὶ φιλοτιμία*)、財貨を愛し、利得を愛するもの (*φιλοχρηματίας καὶ φιλοκερδής*) の三つの類型に區別し、知識を愛するもの、即ち哲學者の生活に最高の價值と眞の快樂とを與へてゐるからである。^(九)のみならず我々はその最初の表現を求めて恐らくピュタゴラスにまで遡ることができらう。ヤムプリコスの傳へるところによれば、ピュタゴラスは人間の生活の道^(一〇)を凡ゆる階級の人々が各自の利益を目指して集つて來るオリュムピアの祝典になぞらへてゐる。すなはち或る人は群衆に商品を賣りつけて一儲けをするためにそこに來るし、また或る人は卓れた體力を演示して名聲をえようとし、他の最も自由に恵まれた人は美しい演技を見物するためにやつて來るのである。人生もまたかくの如く、或るものは利潤と逸樂とを追求し、權力と支配とを狙ふものは勝利と名譽とを念願するが、最も純粹なる人々は最も美しきものの觀想 (*τῶν τῶν καλλίων θεωρία*) をのみ意圖し、これこそ哲學者と名づけられるに相應しいのである。^(一一)ピュタゴラスは紀元前六世紀の中葉から末期にかけて活躍した人である (彼の阿克メーは、アポロドロスによれば、オリュムピア曆、第六十二期、第一年、すなはちおよそ五三二年に當る) からして、かの三つの生活態度が——なほ極めて素朴的な日常的な意味においてであるにしても——すでにこの時代において語られてゐたことは明かであらう。しかしこれらの事實は一體何を意味してゐるのであらうか。我々はこのことを明かにするために次の三つの問題を提示しなくてはならぬ。

一、ギリシヤ人の哲學的生活理想としての觀想的生活 (*θεωρητικὸς βίος*) ——キタロはそれをラテン語に移すために *vita contemplativa* としふ表現を選び、後世において最も愛好されるこの *terminus technicus* の基礎を作つた——とはもととも如何なる意味をもつてゐたであらうか。

二、我々はこの觀想的生活の起源を何處に索むべきであらうか。たとへその文獻學的理據はピュタゴラスに歸せられるにしても、その精神的起源はなほ遠く遡りうるであらうか。

三、哲學者の理想たる觀想的生活は他の生活、とくに政治的生活ないし實踐的生活に對して如何なる關係をもつたであらうか。

(1) *Ethica Nicomacheia* A 5, 1095 b 17—19. この著作の原本と看做せるべき「エニクマキス倫理學」(*Ethica Eudemia* A 4, 1215 b 1) と同じくは觀想的 (*θεωρητικὸς*) の代りに哲學的 (*φιλοσοφικός*) なる言葉が用ひられてゐる。これは恐らくヘラトンの源泉を示唆するものである。註子を参照せよ。

(11) *Eth. Nic.* A 1, 2.

(13) *Criton.* 48 B. *Eth. Nic.* A 8, 1098 b 21—22 と同じくは *εὐδαιμονία* なる幸福の定義を参照せよ。

(14) *Eth. Nic.* A 4, 5. なほギリシヤ人にとつて幸福 (*eudaimonia*) なる言葉が何を意味したかについても、特に M. Heinze *Der Eudaimonismus in der griechischen Philosophie*, 1888 を参照せよ。

(15) W. Jaeger; *Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, 1923. S. 78 ff.

(16) *Diogenes Laertios*; VII, 130.

(17) *Stobaios*; II 144, 16. *Cicero*, *Ad Atticum*, II 16.

(八) Eth. Nic. A 4, 1095 a 29—30. b, 1096 a 3.

(九) Respublica, IX 581 C—583 A.

(一〇) Lamblichus; De vita Pythagorica 58. Diog. Laert. VIII 8. Gioero; Tuscul. Disput. V3. Pythagoram autem respondisse sibi videri vitam hominum et mercatum eum, qui haberetur maximo ludorum apparatus totius Graeciae celebritate: nam ut illic alii corporibus exercitatis gloriam et nobilitatem coronae peterent, alii emendi aut vendendi quaestu et lucro dicerentur, esset autem quoddam genus eorum idque vel maxime ingenium, qui nec plausum nec lucrum quaerent, sed *visendi causa* venirent studioseque perspicerent quid ageretur et quo modo, — alios gloriae servire, alios pecuniae; raros esse quosdam, qui ceteris omnibus pro nihilo habitis rerum naturam studiose intuerentur; hos se appellare sapientiae studiosos, id est enim philosophos, et ut illic liberalissimum esset spectare nihil sibi acquirentem, sic in vita longe omnibus studiis *contemplationem rerum cognitionemque praestare.*

II

一九二〇年四月二十四日、ハイデルベルクのアカデミー創立十周年記念祝典の席上、卓れた古典學者フランツ・ポルは、我々と同じ題目の下に記念講演を試み、上に掲げた諸問題に對して極めて説得的なそして公式的な解釋を與へた。⁽¹⁾それ故に我々は我々の論議の基礎としてまづこの著名な講演を取り上げねばならぬ。

觀想的な生活とは何であらうか。それは決して精神的緊張を缺いた怠惰な享樂に近い瞑想的な沈潜を意味するのではない。品のよい諦めといつたやうな特長をもつところの一種の靜寂主義(quietism)はギリシヤ人の旺盛な生活力

が半ば消耗され破綻に瀕してゐた時代、すなはちヘレニズムの時代にはじめて現はれたのであつて、たとへばエピク
 ロスの「隠棲せよ」(Abbe Pison)といふ生活の箴言、あるひはアツチカの新喜劇作者メナンドロスの断片などのう
 ちに我々はその明かな證跡を見出すことができる。またそれは神祕主義者の諦觀を意味するのでもない。すでにエル
 ヴィン・ローデが指摘したやうに、神祕主義はギリシヤ人の血のなかの異質的な一滴であつて、神の祕密のうちに瞑
 想的に沈潜し忘我の境に入つたことは、オルペウスの教説やピュタゴラスの生活にあつてすら決して爲し遂げられな
 かつたことである。ギリシヤ人のみならず一般にヨーロッパ人は諦觀的な祈禱なるものをエジプトのイシス神の崇拜か
 らはじめて學んだのであつて、それはもともとギリシヤ的なロゴスではなく、東洋的なグノーシスの領域に屬して
 ある。古典時代の純粹にギリシヤ的な意味における觀想的生活(Bios Theoretikos)——vita contemplativa——はむ
 しろ思想家ないし探究者の直感あるひは感覺に結びついたものとみらるべきである。

Theoretikos なる言葉は一般に見る人すなはち見物人、觀測者、諦視者などを意味するが、それはとくにギリシヤ
 の都市から寺院、祝祭などに神への使者として遣はされた者に對して用ひられた。そしてギリシヤの民族的感覺が
 Theoretikos-Theoprosopos の語源的關聯からして、そのうちに神なる言葉を汲みとつたであらうことは疑ひを容れな
 いけれども、それが俗世間的に用ひられるに及んで、その微妙な宗教的陪音は残つたにしても、汎ヘラス的祭典にお
 ける種々の演技の參觀の記憶が失はれるに至つたのである。かゝる意味關聯はまた動詞 Theoretin あるひはそれから
 來た名詞 Theoria から窺ふことができるであらう。これらは一般に見ることを、そして初期の作家にあつてはしば
 しば祭典への使者となることを、あるひは劇場において見物することを意味し、プラトンにおいては身體的に感性的

なるものを見ること、並んで精神的に超感性的なるものを見ることを意味した。しかるにアリストテレスに至つてはじめて *θεωρητικόν* なる言葉が一定の生活態度を表示するために用ひられ、エネルゲイアによつて充された能動的生活を問題とした。「オリュムピアにおいて榮冠を戴くのは最も美しき人々や最も強き人々ではなくして、競技を行ふ人々（そのうちの或る人が勝利をうるのであるから）であると同様に、正しい仕方⁽¹⁾で人生における美しき善を達成するのはその能力を働かせる人々である」とかれは「ニコモコス倫理學」に書いてゐる。また他の場所において「實踐的生活は、或る人々が考へてゐるやうに、必ずしも他の人に關係せねばならぬわけではなく、行爲から歸結するもののために生じる思惟のみが實踐的であるのでもない。むしろ自己完了的であり、自己目的々な觀想 (*θεωρία*) や思惟がより以上に實踐的なのである」と述べたのもまた同じ意味においてであらう。アリストテレスにとつて最高の意味における行爲者は外的に形成するまへにそれを思惟において構成する創造者なのである。

同じ語義の變遷を我々はまた *βίος θεωρητικός* に對して正しくも選ばれた *vita contemplativa* のうちにも見ることができるのであらう。動詞 *contemplor* はローマの宗教上の法規に由來し、*templum* (これは切ること、切斷を意味するギリシヤ語 *τέμενος-τέμενος* と同じ語根である) はローマの占術家が神の意志を徴する際に立つ四角の區劃であり、同時にかれが曲杖を以て境界を劃し、そこで神の啓示や雷鳴、稻妻などを觀察したところの蒼穹であつた。従つて *contemplor* なる言葉は根源的には「地上及び天上における聖域を觀察する」ことを意味し、そして後に古代哲學が宗教によつて支配され、ヘレニズムの神祕主義及びキリスト教が迫り來るに及んで神の直觀の意味に用ひられるに至つた。肉眼及び心眼によつて把握される驚異すべき可視界の觀察と認識との代りに、いまや不可視的なる神へ

の信仰に充ちた沈潜がはじまるのである。⁽³⁾

ところで観想的な生活といふ探究者及び哲學者の新しい生活態度は如何なる時代にギリシャ人の生活のなかには入つて來たのであらうか。ホメロスのエポスは多くの都市を遍歴して人々の意見に通曉した伶俐にして博學なオデュッセウスに腕力あるアキレウスを對立せしめてゐるが、こゝでは純粹に實踐的な知識が問題となつてゐるに過ぎない。七賢人はかれらの冷徹な人生の考察によつて新しい生活理想への過渡をなす。ヘロドトスの傳へるところによれば、ソロンは六世紀の初頭はじめて觀想のために、(θεωρίας εἰςκεν) 知識を求めて (ψυλαγωγέω) 諸國を巡遊したといはれる。そしてヘカタイオス、ヘロドトスその他多くの人々が鬱勃たる探究への衝動によつて彼に續いた。勿論かれら地誌、民俗誌、歴史の代表者たちはすでに東洋に多くの先驅者をもつたけれども、これらの人々が主として「王宮の寺院の、そして神々のために」他國を巡歴したのに對して、かのギリシャ人においてははじめて世界の客觀的認識への要求が成立したといはなくてはならない。

同様の事情は哲學者、自然探究者、數學者についてもあて嵌る。かつてホメロスの自由なる人間性がその世界像を形成したと同じイオニアの海岸において實踐的興味によつても、支配者の意志によつても、ないしは宗教的傳統によつてもその生活内容を規定せしめやうとしなかつた一群の思想家が出現した。我々は新しい人間の類型を具現してゐるこれらの最も特徴ある人物として、その先驅をなすところのタレスの外にヘラクレイトス、パルメニデス、アナクサゴラス、デモクリトスなどの名を擧げることができらう。そして彼等の日常的なるものに對する超人間的無

關心あるひは俗衆との霄壤的距離を理解するためには、かれらについて語られてゐる數多くの傳説ないし逸話を想起すれば充分であらう。たとへばプラトンが「テアイテトス」において傳へてゐるやうに、タレスは星の觀測をしてゐて溝に落ち、トラケ出の下婢にかれが天のことを知らうと夢中になつて、足許のことに氣づかなかつたのを笑はれたといはれる⁽⁶⁾。また、ディオゲネスが傳へてゐるやうに、アナクサゴラスはかれが何のためにこの世に生れて來たかと思はれたとき、昂然として、太陽と月と天體を觀測するために、と答へたといはれ、またかれが無神論と反逆罪の廉で死刑を宣告せられ、同時にかれの息子らの死去の通知を受けとつたときかれは自若として、(自らの死刑について)自然はすでに以前から裁判官と同様自分に死刑を宣告してゐたのだ、そして(息子らの死について)私はかれらが死すべきものとして生れたのだといふことを知つてゐると答へたといはれる⁽⁷⁾。これらの逸話の價值については後に觸れるであらう。

アナクサゴラスがアテナイを見棄てたのと殆んど時を同じくして前代未聞の特異なる人物が登場する。アテナイの人ソクラテスである。市場の雑沓の中で倦むことなく凡ゆる種類の人間と對話する彼を特徴づけるのは、純粹なる理論的生活である。彼は從軍したときを除いては故郷を去つたことがない。かれは赤貧に安んじて家庭を省みず、政治的鬭争を侮蔑して、その渦中に入ることを避け、「ソクラテスの辯明」で言つてゐるやうに、かれにとつては探究のない生活は生きる價値のないものであり、この確信を身を以て實踐し、殉教者の情熱を示すことなく、靜かな澄明さのうちに哲學者の死を死するのである。こゝに哲學的生活理想としての觀想的生活の究竟的な姿がある。我々はもはやギリシャの偉大なる數學者アルキメデスに至るまでの系列をこれ以上辿る必要はないであらう。かれは砂上に幾何

學の圖形を描くことに熱中して、かれの故都が陥落したことを知らず、また傳説はかれをして闖入して來たローマの兵隊にむかつて「私の圓を毀さないでくれ」と叫ばしめてゐるが、これこそ探究生活の防衛のための神聖な最後の言葉なのである。

ところでギリシヤ人の日常的な生活感情はこれらの新しい型の人間をどのやうに受け入れたであらうか。勤勉に働き、政治的に絶えず刺戟を受けてゐる人々はピュタゴラスの比喩にいはゆる自由なる觀客 (Dasein) に對して如何なる關係をもつたであらうか。ヘロドトスによれば、ソロンはクロイソス王との注意すべき對話において、人間の到達しうる最高の幸福として、繁榮してゐる時代に一つの都市で裕福に生活すること、優れた息子や孫たちが生長するのを目のあたり見て、誰も亡くならぬこと、國家的な競技に榮冠を獲ること、そして最後に勝利の戦で名譽の戦死をとげることができることを示したといはれる。我々はこゝに初期時代のギリシヤ人の全く地上的にして此岸的な生活理想を見ることができらう。日常的なギリシヤ人の人間觀は決してピュタゴラスのそれではなかつたのである。確かにギリシヤの諸都市は後には哲學者や學者の名聲を顧慮して、かれらの或るものは法律を作らせ、公費を以てかれらの多くのものの塑像を作り、その肖像を壁に掲げた。また知識慾ある群衆が凡ゆるギリシヤ世界の隅々から哲學々校に流れ込んで、アテナイの俗人どもの向學心を煽ることに役立つた。そして俗人的なるものから逸脱しようとする貴族時代以來のギリシヤ人の傾向は、なによりも愛好された閑暇を高貴なる仕事に利用し、より高い觀想を以て滿された眞の自由を尊重するやうに導いた。そして純粹なる精神的活動に對するかうした畏敬の念こそギリシヤ文化をローマに齎し、

キケロへの遺産となつたところのものである。しかしこれらはただ事實の一面にしか過ぎぬ。

ひたすら學的探究に没頭する生活に對して古典時代のギリシヤ人がつねにこのやうな態度をとつてゐたわけでは決してない。エウリピデスはかれの後年の作品「アンティオベ」において活動的生活の代表者ゼトスと觀想的生活の代表者アムプイオンとの全く性格の異つた二人の兄弟の葛藤を描き、前者はミューズの神にのみ捧げられた非實踐的生活を非難し、後者は腕力よりも精神力を讚美するのである。理論的生活と實踐的生活との拮抗は、しかし、エピカルモス、クラティノス、アリストパネスなどの喜劇及びティモンからルキアノスに至るギリシヤローマの諷刺劇のうちさらに辛辣に表現されてゐる。そしてその最も代表的なものとして、アリストパネスの「雲」に描かれてゐるソクラテスの滑稽な相貌と奇異な言行とを擧げることができらうであらう。我々はこれらの各々のものに觸れる邊はないけれども、これら凡ての文獻のうちを示されてゐるのは觀想的・理論的 (Theoretical) 人間に對する忌憚なき批判である。通常のギリシヤ人にとつては、青白い顔をして終日書齋に蟄居し、新鮮な空氣には姑くも耐ええぬ様な哲學者の生活は、毎日拳闘の練習場に通つてゐる若者たちが嘆賞し愛好するところのものから餘りに遠いものであつたに違ひない。このやうな特殊な人間の代表者は好んで飢餓に瀕し、得々として世を棄てる人であるやうにみえる。のみならずかれらがつねに常軌を逸した服裝をし、華美な生活をしてゐることは、かれらの教説そのものを裏切るものとして人々を激怒せしむるに充分であつたであらう。アテナイの民衆の大部分にとつては「知識を愛する人」は閑な饒舌家であり、かれらが理解しえぬところの議論の對象は無意味なものであつたに違ひない。

日常的生活と哲學的生活との對立をプラトンはかれの若干の對話篇において最も峻嚴に取り上げてゐる。すなはち

Vita Contemplativa

「ゴルギアス」における超人の擁護者カリクレスと哲學者ソクラテスとの應答はかのゼトスとアムピオンとの對話を想起せしめ、また「テアイテトス」におけるかの著名なる挿話は實踐的生活に對する哲學的生活の優位を印象深く敘述してゐる。⁽²¹⁾しかし恰かも敵對する二つの世界のやうなこの協和し難い溝渠もかれの理想國を實現しようとする企てを放棄せしめはしなかつた。周知のやうにこのことはプラトンにとつて最も手痛い失望となつたのであるが、それはかれが洞窟の比喻において示した意味深き思想、すなはち完全な國家においては哲學者が支配權を把握せねばならぬといふかれの倫理的理想の實現に對してかれが拂つた犠牲なのである。かれにとつて單なる實踐的人間は、あたかも奴隸が自由人に對するやうに、永遠にして眞なるものを觀想したところの哲學的人間に對立する。そして眞の幸福が哲學的人間にのみ約束されるであらうことはかれの八十年の生涯を通じて渝らざる確信であつた。

アリストテレスの倫理學は、我々が最初に觸れたやうに、善なる生活の研究にその冠冕を見出す。社會は自然的所與であり、人間はその本質上國家的動物であると考へるところのこの哲學者は國家の外に個人を措定しようとはしない。しかし最も完全なる幸福は我々のうちにある神的なるものの活動である。それは凡ゆる可死的なるもののうち人間に特有なる存在であり、それ故に最も人間的なるものである。この神的なるものは理性に外ならぬ。理性が與へる愉悅は行爲から生ずる如何なる愉悅よりも大である。かゝる生活は人間のそれよりもより高きものである。神自らもかくの如き純粹認識のうちにのみその淨福を見出すであらう。これはまさしくキケロの失はれたる對話篇「ホルテンシウス」を通じて、アウグスティヌスに復活したところの思想である。「我々がこの地上的存在に別れを告げて、神話に語られてゐるやうに、幸福の島に不死の生活を營むとき、勇氣、正義、節制、思慮などの徳はもはやその意味を

失ふであらう。我々は之を自然の観想と神の生活のみを稱へんを認識とにまつのみ幸福となるであらう。⁽¹¹⁾ 之が
 である。 *vita contemplativa* の講義は古代文化の最後の遺産たるボヘンハイムまで続くのである。

(1) Franz Boll; *Vita Contemplativa*, Festsrede zum zehnjährigen Stiftungsfeste der Heidelberger Akademie der
 Wissenschaften, am 24. April 1920.

(11) Menandros; *Fragm.* 481 (オセネタスの著わしめる喜劇論の1部を引用して)
 Den nenne ich glücklich, Parmenon, vor allen,
 Der ohne Leid geschaut, was herrlich ist

Auf dieser Welt, und dann, von wo er kam,
 Dorthin schnell wieder kehrt zurück.——

42 E. Cicero; *De Republica*. III 6, *De Finibus*. I 71. Usener; *Epikurica*. Pr. 425 f 参照。

(III) E. Rohde; *Kleine Schriften*. II S. 338.

(IV) *θεωρητικὴ-θεωρητικῶν*. 以下に關聯する諸語の語源及び語義の詮議についてはボンの周匝なる考證を參考せよ。Boll; *op. cit.*
 (2 Aufl.) S. 26 f.

(H) *Eth. Nic.* A 8, 1099 a 3—7, *Politica* H 3, 1325 a 16—21.

(K) *Contemplor, contemplatio*. 424 20 0 5 1 2 Boll; *op. cit.* S. 28 ff. 参照。

(L) *Theaet.* 174 A. *Diog. Laert.* I 34.

(M) *Diog. Laert.* II, 10. 13. *Eth. Eud.* A 4, 1215 b 6—14.

(N) *Euripides*; *Fragm.* 183—202. *Platon*; *Gorgias* 484 E.

Vita Contemplativa

一 橋論叢 第九卷 第一號

- (10) これら喜劇作品における哲學者像については Boll; op. cit. S. 33ff 参照。
 (11) Gorg. 481 C—486 C, Theaet. 172 C—177 C, Resp. 487 B—497 A.
 (111) Cicero; Hortensius, Fr. 50, Augustinus De Trinitate, XIV 9.

三

我々がさきに掲げた三つの問題に對してボルが上に與へた解答を要約すればおよそ次の如くであらう。一、テオレティコス¹⁾は根源的に神への使者を意味するテオロスとの關聯において用ひられ、後その宗教的意味を失つて近代語における理論的 (theoretisch, théorique, theoretical) の意味を有するに至つた。二、古代の哲學者を性格づけるかかる生活はすでに哲學の始祖タレスにはじまり、古代文化の遺産を中世に引繼いだボエティウスに至るまで持續した。三、日常的人間はかゝる哲學的人間に對して畏敬の念とともに侮蔑の情を抱き、實踐的生活と觀想的生活とは絶えず抗争した。そして最後にボルは現代を支配してゐる *vita contemplativa* への反感と凡ゆる生活を政治化する傾向とに對して、明かにアリストテレスの思想を想起しながら、次の警告を與へてゐる。「觀想し探究しつゝ活動する凡ゆる瞬間において、學問はその課題を果す、なぜなら藝術家の創作におけると同じく、學問のうちこそ人間の滅しえざる最高の生活機能が働いてゐるからである。純粹認識の凡ゆる瞬間において、人間に可能である限り、永遠の一部分が體驗されるのである。」²⁾

觀想的生活 (*Bios θεωρητικός*) の根源的意味についてはまさしくボルが丹念に究明してゐる如くであらう。我々の

疑問は主として第二、第三の問題にむけられる。ギリシャの哲學者たちの生活は果してその始祖以來純粹に「觀想的」であつたであらうか。そしてまた觀想的生活は實踐的生活とつねに相剋してゐたのであらうか。我々はむしろ比較的後の時代に定式づけられた *vita contemplativa* なる範疇を古代にまで遡及せしめ、そこに哲學的生活の独自の權威を求めようとしてゐるのではないであらうか。ディオゲネス・ラエルティオスの「哲學者列傳」(*Diogenes Laertius*)は、我々がしばしば引用して來たやうに、ポルの結論を證言するかのやうな多くの哲學者の逸話、傳説を遺してゐる。けれどもこの著書は極めて無批判的なむしろ興味本位の逸話集であつて、プロティノスとほど同時代の人であるところのこの書の著者がこの世紀を風靡したところのストア的、新プラトン主義的世界觀によつて超越的な哲學的人間の精神生活を想定し、それを古代の偉大なる名に結びつけたであらうことは決して擅なる推測といはるべきではない⁽¹⁾のみならずディオカルコスによつて書かれた「哲學者所傳」(*Bios Philosophorum*)の現存する僅かの斷片もこのことを證言するであらう。なぜならば人間の生活理想を、テオプラストスのやうに觀想的生活ではなく、むしろ實踐的生活においたこのアリストテレスの弟子は、これらの斷片において古代の哲學者のうちにかれ自身の理想を反映せしめ、哲學的生活を公共的生活に結合せしめてゐるからである⁽²⁾。これはまさしくディオゲネスと對蹠的位置に立つものといふべきであらう。従つて古代の哲學的生活理想としての觀想的生活の論定にかれらの所傳を選ぶことは危険を伴ふのである。

タレスに例をとらう。さきに引用されたやうに、かれは無教養な下婢に冷笑された程世事に迂遠な典型的哲學者と信ぜられてゐるのであるが、アリストテレスは「國家學」においてそれを覆す事實を證言してゐる。それはこうであ

る。彼が貧乏であるために人々は哲學を無用のものとしてかれを非難してゐたのであるが、かれは天文學によつて橄欖が豐作となるだらうことを看破して、なほ冬であつたにも拘らず、若干の金を工面してキオスとミレトスにあつた凡ての橄欖搾油機を、競争者がなかつたため、僅かの金額で借り受け、その季節となつて果して橄欖の收穫が豊富で一時に搾油機が需要されたため、かれは欲するままの條件でそれを貸すことができ、莫大な金を收得することができた、それによつて哲學者たちは欲しさへすれば容易に金持にもなりうるのであるが、かれらが心掛けてゐるのはそのやうなことがらではないといふことをかれは證明したのである。そしてアリストテレスはかゝる逸話について、人々はそれをかれの智慧のためにかれに歸してゐるが、一般的な性質なのであらうと述べてゐる。ディカイアルコス^(四)は七賢人を賢人でも哲學者でもなくして利口なそして立法に巧みな人々であると言つてゐるが、これはソロンやピタコスなどについてのみでなく、またタレスにも妥當するのである。かれはキュロスに對抗するためにクロイソスと同盟せぬやうミレトスの人々に忠告したといはれ、卓越した政治家であつたことを示してゐる。従つてかれは思索と行爲との、觀想的生活と政治的生活との完全なる統一を實現し、最高の思想をもつたものはまた實踐的生活の統帥者^(五)(*ἡγεμόν τετρακτικός*)でなくてはならぬといふアリストテレスの思想を如實に實踐した人といはねばならぬ。タレスのみではない。アナクシマンドロス、ヘラクレイトス、パルメニデス、ゼノン、エンペドクレスなども、ディカイアルコスによれば、政治に參與し哲學的生活との調和を示しえた人々なのである。さうであるならば、ボルの主張するやうに、かれらを直ちに *vita contemplativa* の象徴とみることはできない。のみならずギリシヤ人の生活意識において觀想的的生活と實踐的生活とがそれ程矛盾したものであつたか否かは疑はしい。アナクサゴラスは、かれが何故に祖國のこ

とに關心をもたないのかと訊ねられたとき、天上を指して、私は祖國のことだけを心にかけてゐるのだと答へたといはれてゐる。^(七)かゝる逸話は超越的なる *vita contemplativa* への讚美ないし嘲笑を意味するのではなく、却つて古典時代のギリシヤ人にとつて哲學的生活の政治的生活からの游離がいかに特異なる印象をかれらに與へたかを示すものとも考へることができるのである。しかしこれらの逸話を基礎とする論議は、すでに言はれたやうに、それらの客觀的價値が保證されぬ限り、我々の問題に對して多くを寄與することは出来ぬであらう。

我々はこれらの問題についてのより合理的な解決に一つの示唆を與へるために觀想的生活の基本原理をなすところの *σοφία* なる概念と實踐的生活の指導原理をなすところの *ἐπιστήμη* なる概念との二つを取り上げ、これらの意味關聯とその發展とを迹づけてみよう。

σοφία なる言葉の意味を闡明した最も古典的な場所は、周知のやうに、「ニコマコス倫理學」第六卷、第七章である。^(七)そこではおよそ次のやうな定義が與へられてゐる。ソフィアー（知）は種々の技術においてその技術の最も精密なる人々に歸せられる。たとへば建築家ペイディアスや彫刻家ポリュクレイトスをソポス（知者）といふ場合の如きこれである。従つてソフィアーとは技術の優秀性 (*ἀρετή τεχνική*) を示す以外のものではない。しかるにそれはまた部分的にある特殊の點についてはなく一般の知と解される。この意味においてはソフィアーは諸學のうち最も精密なものではなくてはならない。従つてソポスは原理から歸結するもののみならず原理そのものについても眞理認識を有しなくてはならぬ。従つてソフィアーとは理性及び學問であり、最も高貴なることがらに關する學問である。なぜな

ら人間が宇宙における最善なるものではない限り、政治的知識 (*politikē*) や道徳的知識 (*epi-deiktikē*) を最も重要なことがらと考へるのは不合理だからである。こゝではソフィアーは明かに技術の優秀性と第一哲學との二つの意味に語られてゐる。そして前者はギリシャの傳統に従つた用法であり、後者はアリストテレス独自の用語であることも人の熟知するところであらう。

ソフィアーが初期時代の作家によつて技術 (*technē*) と同義語として用ひられたであらうことは、アリストテレスが同じ場所において引用してゐるホメロスの「マルギテス」の斷章その他の場所から、さらにはヘシオドス、ピンダロスなどの用法からも推知することができる。⁽¹⁰⁾ のみならずこの言葉の語根 *sofo-* がもともと職業的生活——たとへば *xein-sophos* || „Hand-work などを表示したといはれることから明かであらう。⁽¹¹⁾ しかし我々はこれらの文學的考證に立ち入る必要はない。我々にとつて重要なのは初期時代にソフィアーがテクネーと同義的に用ひられたことによつて、理論 (*theoria*) と最も廣い意味における實踐 (*praxis*) との調和がこの時代の特色をなしてゐたであらうことである。ソフィアーはいふまでもなく理論的領域のそしてテクネーは實踐的領域の基本概念だからである。さらにアリストテレスがソフィアーの傳統の意味を技術の優秀性 (*aretē*) と規定してゐることを見逃してはならぬ。通常徳 (*virtus*, *Tugend*) と譯されるところのアレテーがもともと事物の固有の目的の實現における有能性あるひは優秀性を意味したことは周知の通りである。⁽¹²⁾ 従つてテクネーの本質がこの意味におけるアレテーに存し、それ故に *σοφία=ἀρετή=τέχνη* の等式が成り立つことも縷言を必要としないであらう。七賢人がソポスと呼ばれたのはまさしくかゝる意味においてでなければならぬ。⁽¹³⁾ またソロンが觀想 (*theoria*) のために諸國を遍歴したといはれるとき、この

テオリアーはソフィアーと同義に解さるべきであらう。しかるにアレテーが精神的、倫理的内容をもつことによつて、それはテクネーから離反して *ageloiageth* となり、理論とより狭い意味における實踐との統一がなり立つのである。ソクラテスにおける眞理認識と實踐能力との統一、いはゆる知行合一説はまさしくかゝる段階を示すものといはねばならぬ。そしてプラトンが「ポリテイア」においてアレテーの完成者たるフィロソφος（哲人）こそ一國の王者たるべきであるといふ思想を掲げ、かゝる理想國を現實に成就するために再三シユラクサイに赴いたとき、かれも忠實に師の遺鉢を繼いだものといふべきであらう。

我々はソフィアーとアレテーとのそして理論と實踐との分裂をアリストテレスにおいてはじめて見出す。このことはソフィアーと我々が先に示したプロネーシスとの意味關聯を明かにすることによつて確證しうるであらう。プロネーシスはもと正しい道徳的知見を意味し、ソクラテス、及びプラトンにあつてはこの言葉はソフィアーと全く同義的に用ひられた。そして初期アリストテレスの「プロトレプティコス」においてもかゝるプラトンのプロネーシスが見出され、同様に「エウデモス倫理學」においてもアナクサゴラスが純粹なるプロネーシスの生活の代表者と見られてゐる。しかるに「ニコマコス倫理學」にあつては、さきに引用された所から明かであるやうに、プロネーシスは倫理的知見あるひは實踐的認識に限定され、これに反してソフィアーは形而上學的識見あるひは理論的認識に限定された。こゝではアナクサゴラスの如き超越的なる哲學者がソφοςと呼ばれ、ペリクレスの如き有能なる政治家がプロネモスと稱せられてゐるのである。⁽¹¹⁾ プラトンが「シユムポシオン」においてエロトスの哲學的意味を強調し、人間の立場をフィロソフィアー（愛知）に求めたに對して、アリストテレスがかれの「第一哲學」をソフィアーと規定したことは

敘上の思想發展の事實を想ひ合はせれば、決して偶然ではなかつたのである。しかし我々はヴェルナー・イェーガーによつて克明に論究されたプロネーシス概念の發展をこゝに繰返へす必要はないであらう。^{二三}

以上の論據にして大過なしとするならば、我々はさきの問題に對して、ボルとは全く反對に次のやうな結論に到達せざるをえない。觀想的生活——*vita contemplativa*——はアリストテレスによつて、とくに「ニコマコス倫理學」第十卷において理論づけられ、ストア學派によつて實踐された生活理想であつて、これを初期の哲學者、ことにタレスにまで遡及せしめやうとするのは一つのアナクロニズムにしか過ぎない。そして古典時代のギリシャ人の意識においては觀想的生活と政治的生活ないし實踐的生活とは異なる二つの世界を構成してゐたのではなく、アナクサゴラスの如き人はむしろ例外に屬するのである。しかしこれらの結論はさらにそれぞれの哲學者の個々の學說について論證するべきであらうが、我々はこれを他の機會に譲らねばならぬ。

- (1) Boll; op. cit. S. 20.
- (二) このことは、たゞ「プラトンの學說に對するマイオナキメの解釋」(III 67—80)を檢討することによつても明かにされべきである。Überweg-Praechter; Grundriß der Geschichte d. Philosophie 1920. I. S. 565 f.
- (三) Fragmenta historicorum Graecorum ed. Mülle R. L. W. Jaeger; Über Ursprung und Kreislauf des philosophischen Lebensideals. (Sitzungsab. d. Preuss. Akad. d. Wiss. phil.-hist. Klasse. 1928. XXV) S. 412 ff.
- (四) Pol. A II, 1269 a 9—19.
- (五) Frag. hist. Graec. II 243. Diog. Laert. I 40. 參照。
- (六) Diog. Laert. II 7.

